「荻外荘（てきがいそう）」の建築的特徴とその魅力（その二）

竹中工務店 設計本部 アドバンストデザイン部門
伝統建築グループ
山野（やまの） 敬史（たかふみ）

前回は創建時の平面図から読み取れる建築的特徴、特に間取と構造面に伊東忠太の住宅観が伺える点に「荻外荘」の大きな魅力の一つがあることを述べた。また大正から昭和初期にかけて生活を改善していこうとする流れが活発化するなかで、板敷と畳敷が混在する様式にも、椅子式の洋風の生活を理想としながらも、慣習的な和風の生活が残ることを許容した伊東忠太の折衷的な住宅観が伺える。そして、今回は予告通り内観と外観より伺える建築的特徴から「荻外荘」の魅力に迫ってみたい。もちろん主役は伊東忠太である。文献は『中流住宅』[1]を主とし、内観の竣工写真３枚と外観のそれ１枚を参考にする。

写真１　創建時の食堂

写真２　創建時の客間

「住宅はあたかも着物のようなもの」[2]。住宅を衣服の例えをもって語るあたり、伊東忠太の感性をなんとも豊かに思うのだが、紙面が限られているため深入りはしない。『中流住宅』の「真の良い建築」という節[3]にて、伊東は「成金建築」と区別し、「住む人の身分に相応しいもの」こそ「真の良い建築」と定義し、先述した例を引き合いに出す。「良い着物」は「その人に相応しい柄、裄丈（ゆきたけ）が合って、立居に便利で、辻褄があったもの」であると同様に、「住む人に相応しい柄で、材料は質素でも何処までも辻褄が合って初めて良い建築」と述べている。「相応しい柄」とはどのようなものか気になるところではあるが、前回引用した『住宅』[4]で伊東は「柄」と類似する「色」についてこう述べている。「なるべく原色でない色が住家としての目的に適応している」。さらに、客間や食堂は「華麗、奇抜、あるいは軽快な色彩」、書斎は「どっしりした感じの色」、寝室は「落ち着いた色」がよい、と。部屋ごとに目的に合わせた色の選択を良しとしているのである。なるほど、当文章を読んだ後で、写真１と２を見ると合点がいく。色については、白黒写真なので判別がつかないが、内装に使われた壁紙からすると確か

に、華麗で、奇抜な「柄」のように見える。これらを踏まえると、内観から住み手である入澤達吉に相応しい表現を試みた伊東の住宅観が伺えるといえよう。

次は外観の話である。「外から見た家の体裁格好は昔からあまり考えられなかったもので、大工の方でも一定の型があって、ほとんど千遍一律に建ててきました」[5]。伊東は『中流住宅』における「住宅の表情」という節[6]の書き出しをこう始めている。そしてさらに「また注文する方でも、ただ間取具合や設備等ばかり指図して外形は大工に任せきりにします」と続ける。この伊東の言葉は重い。それは当時の建築家と大工の関係を批判的に捉えた言葉としての重みであるだけでなく、日本に根付いている大工の「一定の型」に対し、建築家は外観を自ら設計しなければならないという伊東の態度を伺える点においてとても重みのある言葉だと私は捉えている。では外観はどうあるべきなのか。伊東はこう続ける。

写真３　創建時の南東より見た外観

「家の外観にも表情があるはずのもので、主人の性格趣味が表れなければ面白くありません」。ここで写真３をみて頂きたい。懸魚（げぎょ）付き切妻屋根で妻入りの玄関、雁行する客間や食堂の廊下部分は寺院の裳階（もこし）のようになっており、書斎部分には個別で切妻屋根がかけられ、寝室の窓廻には庇と欄干があり、さらには建具がアクセントとなってなんとも個性的な外観を呈している。以上のことから、住まいの最初の主人だった入澤達吉の性格や趣味を伊東はこの外観で表現したと考えてよいだろう。

内観と外観の魅力に触れたところで、今度は両者の魅力に関わる建物の要素に着目したい。建具である。伊東は『中流住宅』の「建具も閑却（かんきゃく）すべからず」という節[7]で、建具の在り方についても現状批判を交え、次のように述べている。それは工事が進むにつれ費用が予想に反して膨れることで建具にかける予算が減り、建具が悪く、みすぼらしくなってしまうことを嘆き、「はじめから別に予算を取っておいて、その家相当のものを使いたい」[8]と述べている。幸いにも現存している荻外荘の建具に着目すると、確かに個性の一部と言えるような「家相当のもの」であり、工夫が凝らされたものになっていることがよく分かる。

そして建具にはさらなる荻外荘の魅力が秘められている。ここで二人の人物に登場頂こう。一人は、「工事監督建築士」[9]として伊東を支えた金子清吉。もう一人は施主であり最初の住人であった入澤達吉である。まずは金子と建具の関係から。金子は荻外荘を含め、生涯に 12 件もの伊東が設計した作品に関与している人物である[10]。私が着目したいのは金子が『日本住宅建築図案百種』[11]あるいは『日本住宅雑作図案五百種』[12]なる書籍を伊東の校閲で著し、住宅の普及に努めた点である。後者の書籍にはいくつか荻外荘との関連を彷彿させる案が掲載されている。例えば応接間の欄間窓と書籍に掲載された花狭間がそれである

写真４　創建時の応接間

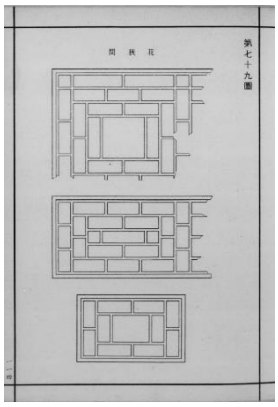

図１　花狭間の図案

（写真４と図１の最下段のもの参照）。「住宅の場合、伊東がどこまで手掛けたかを考慮する必要があ」[13]ることは建築史家である倉方俊輔氏が指摘していることだが、金子のような協力者の存在を伺える具体的な要素があることも荻外荘の魅力と言えるだろう。

次は入澤と建具の関係である。入澤は間接的に建具と関係している。なぜなら入澤は鴨居[14]の高さへのこだわりがあったからである。ここで私はある可能性を指摘しておきたい。荻外荘の鴨居の高さには入澤の考えが反映されているかもしれないということを[15]。入澤は東京帝国大学医科大学教授や大正天皇の侍医を務める傍ら、座り方や姿勢に関するユニークな研究を行ったことでも知られている。入澤はその著書[16]において、鴨居の高さの具体的な寸法に言及している。それは従来の日本家屋の鴨居の高さが５尺７寸と低いために、背の高い人が屈んで歩くことになり、姿勢を甚だ悪くするという指摘である。ではどうするべきか。入澤は少なくとも「鴨居の高さを６尺以上にする必要があると思う」と述べている。この指摘を基に、現存する客間の建具の高さを図ってみると、なんと６尺３寸となっており、その条件を満たしていることが分かる。これは伊東が採光や通風についても重視していた点から、椅子式の生活を考えた場合の設計者の意図だとも考えられる。しかし、設計者だけでなく、施主の想いが反映されている可能性が鴨居の高さから伺えることは、荻外荘の魅力にとってとても大切なことのように私には思えるのである。

前回と今回、２回の寄稿文を通して「荻外荘」の大きな魅力について述べてきた[17]。「大きな魅力」と言えるのは、理想の住宅に対する並々ならぬ伊東忠太の想いを様々な建築的特徴から読み取ることができるだけでなく、その背景となる当時の生活や建築家を取りまく状況を読み取ることができる点にある。さらに施主の入澤や伊東を支えた建築士の金子の想いが伺えるとなると、一層その魅力は増すのではないだろうか[18]。良い建築を語るのに、衣服の比喩を用いた伊東だが、食の例えを引き合いにだして、こんなことも語っている。「要するに家庭本位として理想的な住家は（中略）「米飯的」であって「牛肉的鰻的」であってはいけない」[19]と。牛肉や鰻は実に美味しいが飽きる一方で米飯は日に三度食べても飽きない。永続して住むためにはこの点への配慮が必要だとしている。つまり「荻外荘」の個性的な外観や意図的に和風と洋風が使い分けられているであろう内観からは、主人の性格や趣味に合わせ、理想の生活を実現しようとしながらも、住み手が永く住めるように設計した伊東の意図が伺える点にも大きな魅力が宿っていると言えるのではないであろうか。

[1] 伊東忠太「中流の住宅は如何に設計すべきか」『婦人之友』第十巻第八号（簡易休養号）、大正５年８月 文中では略称として『中流住宅』とする。

[2] 同書、p.26

[3] 同書、pp.25-26

[4] 伊東忠太「住宅」『理想の家庭』国民新聞社、大正４年５月、（内田青蔵監修『近代日本生活文化基本文献集-ひと・もの・住まい-』第Ⅰ期 明治・大正編 第７巻、日本図書センター、2010 年６月）

[5] 伊東忠太「中流の住宅は如何に設計すべきか」、p.28

[6] 同書、pp.28

[7] 同書、pp.28-29

[8] 同書、p.29

[9] 現存している入澤達吉邸棟札（杉並区指定文化財）に記載されている名称

[10] 山崎幹泰「伊東忠太の共同設計者・金子清吉の略歴について」日本建築学会大会学術講演梗概集、2005 年９月

[11] 建築書院、大正２年９月

[12] 建築書院、大正６年８月

[13] 倉方俊輔「伊東忠太の設計思想 妖怪としての建築」（鈴木博之編『伊東忠太を知っていますか』王国社、2003 年、p.125

[14] 開口部の上部に取り付ける水平材。『建築学用語辞典』第２版、岩波書店、1999 年

[15] 鴨居の高さについては、令和２年 11 月の講演「暮らしの変化と荻外荘」で指摘したように、格式との関係あるかもしれない可能性についても指摘しておきたい。第５章「暮らしの変化と入澤家」p.61 https://www.city.suginami.tokyo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/065/668/05_kurashinohenka_to_tekigaiso.pdf

[16] 『如何にして日本人の体格を改善すべきか』日新書院、1939 年

[17] 当然ながら、２回の寄稿文で指摘した建築的特徴が全てではない。詳細は講演会の資料では掲載しているが、例えば倉方俊輔氏上述の著書で指摘しているように書院風のインテリアや中国風の応接室も重要な荻外荘の建築的特徴である。

[18] 管見の限り史料はないのだが、今後新たな史料が見つかって作り手の意向が伺えることになると、より多面的な「荻外荘」の魅力に迫れると思っている。

[19] 伊東忠太「住宅」p.128(内田青蔵監修本 p.170)